

4. 被災地の植生の特徴

(1) 植生の変化

被災地の中心となった防府市佐波川の沿線地域一帯は、瀬戸内地方特有の花崗岩地帯であり、斜面上部では、侵食をまぬがれた岩塊が岩峰を形成し、斜面下部には崩壊・土石流により運搬された堆積物が分布しているところが多い。

多くの斜面は、植生によって覆われているが、土壌層の発達が悪く、密度の低い中・低木林が成立していることから、少なくとも明治期までは、人為的な干渉により森林が衰退したはげ山、ないしは燃料を採取する薪炭林（アカマツ林等）であったと見られる。

はげ山の時代には、表面侵食等による土砂の生産が活発であり、常水は少ないが、洪水時のピーク流量は大きいことから、斜面下部や谷に多量の風化物が集積しやすい。はげ山については、マツやヤマモモが見られることから、他の瀬戸内地方と同様に、明治末期以降、はげ山復旧が試みられたと見られる。

(2) 現存植生

一般に、花崗岩地の植生は、乾燥した酸性土壌を指標するアカマツ林が代表的であり、群落分類上ではネズミサシーアカマツ群集やコバノミツバツツジーアカマツ群集に属する樹林である。しかし、佐波川左岸を中心とした地域は昭和40年代後半からマツクイムシ被害と、山火事の影響などを受け続け、きわめて貧相な樹林となっている。当時のアカマツの故損木が多数残っているが、アカマツ優占林は現在ほとんどない。



写真-4.1 アカマツの故損木が残る二次林

一方、佐波川右岸の剣川沿い、右田ヶ岳や西目山周辺では、ヒサカキ、ヤマモモの低木林あるいはウラジロ科のウラジロ *Gleichenia japonica* やコシダ *Dicranopteris linearis* の羊歯植物が密生する草原にまで植生は劣化している。ウラジロやコシダはマット状の密生群落を形成し、樹木の侵入が難しく、わずかにアカマツ低木やヒサカキ、ヤマモモ、ソヨゴが低木状に散生する程度である。ウラジロやコシダの密生群落は、同時に深さ1m程度の密な根茎層を形成しており、通常の降雨では崩落しないとみられる。



写真-4.2 ウラジロ *Gleichenia japonica*

写真-4.3 コシダ *Dicranopteris linearis*

また、斜面の中下部にかけては、アカマツに代わって夏緑広葉樹のコナラ、クリ、ネジキ、リョウブ、コシアブラが混生する若い夏緑広葉樹林が見られる。

さらに、斜面脚部では常緑広葉樹林のシイモチーシリブカガシ群集の若い再生林となっており、その主要構成木はアラカシ、コジイ、シリブカガシ、ホソバタブ、ヤマモモ、モッコク、ヤブツバキ、クロキなどである。人為的な構成林としては、ヒノキ、スギの人工林、マダケ、モウソウチクの竹林が多くなっている。